第十章　幼な言葉

こゝに幼な言葉といふのは、幼な兒自身の使ふ言葉、又は、幼な兒に向ツて大人が使ふ言葉にして、大人の言葉と共通しないものを指す。遊戯名などは、幼な言葉と大人言葉との區別が無いから、幼な言葉の内には入れない。幼な言葉には二種ある。第一は、大人の言葉とは直接の關係の無いもの。ワンワン（犬）ニャーニャー（猫）等が是である。これを第一次の幼な言葉と呼ぶ。第二は、大人の言葉に改造を加へたに過ぎないもの。メメ（目）ハナ〳〵（花）ダッコ（抱く事）ネンネ（寢ること）等が是である。これを第二次の幼な言葉と呼ぶ。こゝでは、主として、第一次の幼な言葉について論ずる。しかし、實際問題としては、第一次か第二次か、判斷に迷ふものもある。例へば、火をヒーヒといふのは、火を重ねたもので、明に、第二次の幼な言葉であるが、フーフ（美濃・尾張）フーフー（若狹）フフ（薩摩）の方は起りが違ふ樣である。フー（若狹・因幡・阿波）ブー（和歌山・對馬）ブー（埼玉・長野・滋賀・和歌山・德島）ブーブ（米澤・近江・大阪市）ブーブー（近江）ブブ（秋川）等と言ふ所もあるから、この方は、火の燃える音、又は火を吹消す時の音から來たらしい。從ツて、第一次の幼な言葉である。もツとも、ヒ（古音はピか）といふ日本語が、さういふ意味の擬音から來たかどうかは全く別問題である。また、蟲をムイ〳〵（大阪府・神戸・播磨・阿波）といふのはムシムシの訛で第二次の幼な言葉であるが、ミー〳〵、ミミ、メー〳〵、メンメ、ビー〳〵等となると、ムシ〳〵との關係の有無が疑はれる樣になる。

幼な言葉はどんな事物についてあるかと言へば、子供の生活に密接な關係のあるものに限られてゐる。それは又、子供自身の興味の對象と母親の必要とに分ける事が出來る。第一に多いのは身體。これは母に取ツて必要なものである。第二に動物名。子供は動くものや音のする物に注意するからである。第三は食物。子供の慾望は食慾が一番だからである。第四は服飾。これは子供よりも、母に取ツて必要なものである。器具の方は、さすがに、子供の興味が露骨に現れて、動く物、音のする物が多い。その外、天部に關するものも少しはある。少ない方では、植物・人倫・地部・家屋。次に掲げるものは、日本の何處に行ツても、幼な言葉があると認められる事物である。

身體　頭・髮・眼・手・足・陰部・腹・裸・糞・小便・血・怪我・病氣・咳

動物　牛・馬・鶏・鴉・雀・鳥・犬・猫・鼠・狐・蟲・魚・金魚
食物　うどん類・肴・酒・煙草・菓子・乳・握飯・飯・餅・湯水・茶・豆腐
服飾　着物・帽子・傘・足袋・下駄・草履
器具　双物・鋏・旗・提灯・太鼓・手毬・人形・船・車・自轉車・自動車
天文　日・月・星・雨・雪・雷
動作　歩く・落る・負んぶ・仕舞ふ・捨る・坐る・寢る・立つ・起る・抱く・泣く・吐出す・下りる・上る・顏を洗ふ
狀態　恐しい・汚い・綺麗だ・痛い・熱い
雜　赤んべえ・神佛・藥・左樣なら・字・叱る詞・錢・化物・花・火・風呂（入浴）・坊主・繪・果實・有難う・頂戴・刺髮・懷

以上百語の内、方言量の多いのは三分の二位のものである。その少ない方の代表ではポッポ（懷）の一語といふのがある。「立つ」の幼な言葉も、タッタとタッチの二つしか無い。

幼な兒には抽象的概念は未發達であるから、抽象的の言葉は無い。たとへば、アンガ（上る）オンリ（下りる）はあるけれども、「上」「下」といふ言葉は無い。動詞は、その性質が抽象的なものだから、幼な詞の造語には、よほど苦心の跡が窺れる。大部分はタッタ（立つ）ネンネ（寢る）樣な第二次的のものである。第一次的のものは、トンスル（落る）チンスル（坐る）ブルン〳〵（顏を洗ふ）ジャブ〳〵（洗濯）の樣な擬聲・擬態から來たものが多い。

一般に、幼な詞には品詞の別が無い。すべては名詞の如く、感動詞の如く、又擬聲語の如くである。たとへば、ババには「汚い」「汚い物」「糞」の三義があッて、形容詞にも名詞にも使はれる。ババイ、ババチイとなれば、立派な形容詞だが、それは後の發展である。

幼な詞には定まッた傾向がある。實例をあげて説明に代へる。次のは着物の幼な詞である。

長音一回型　パー（北陸）　ペー（北陸・中部）　モーコ（伊勢）
長音繰返型　カー〳〵（秋田）　ペッ〳〵（各地）　ペー〳〵（上總）
上長型　コーコ（志摩）　ペーペ（福島等）
下長型　ペペー（埼玉・備後）
短音繰返型　カカ（秋田・山形）　ココ（秋田）　ナナ（伊勢）　ネネ（仙臺・長崎）　ババ（秋田・大和）　ペペ（各地）　ポポ（青森・盛岡）　メメ（伊勢）
促音繰返型　カッカ（山形・會津）　コッコ（秋田）　ッッツ（壹岐）　ポッポ（青森・盛岡）

撥音繰返型(一)　ビン〳〵(沖繩)　ベン〳〵(熊本・薩摩)

撥音繰返型(二)　チンチ(壹岐)　ネンネ(仙臺・福島)　ノンノ(岩手)　ベンベ(各地)　メンメ(福島)　ノンノ(岩手)　ベンベ(各地)　メンメ(福島)

二字繰返型　パイ〳〵(常陸)　バイ〳〵(常陸)

繰返や長音の多いことが是で判るだらう。次に掲げるのは水の幼な詞である。

長音一回型　モー(近江)　ブー(長野)　オブー(各地)

長音繰返型　モー〳〵(薩摩)　マー〳〵(埼玉)　ブー〳〵(廣島)　ビー〳〵(壹岐)　トートー(伊豆)

上長型　マーマ(埼玉)　ブーブ(福岡・肥後)　チャーチャ(遠江)

下長型　ブブー(大分)

短音繰返型　メメ(岩手・秋田)　ミミ(近江・紀伊)　ママ(青森・關東)　ブブ(各地)　ビビ(長崎)　チャチャ(埼玉・近江)　ゴゴ(薩摩)

促音繰返型　ブップ(盛岡)　トット(駿河)　チョッチャ(信州)　ガッカ(青森)

撥音繰返型(二)　メンメ(岩手・關東)　モンモ(能登)　ミンミ(近江・紀伊・伊豫)　マンマ(岩手・關東)　ボンボ(遠江)　ブンブ(各地)

幼な詞の音の種類は一種か二種が多い。同一語に、三種以上の異なる音を含むものは少い。たゞし長音・促音・撥音は勘定に入れない。この法則に外れたものも少しはある。それは大抵、後世の發展の結果である。たとへば、東京などでは、オベベ(着物)オブー(茶・湯・水)などと、むやみに、オの字を附けるが、これは、幼な詞を使ふ者は主に女だから、女の詞の特徴が紛れ込んだので、幼な詞の本質とは無關係である。愛稱接尾語のコにも、この種の濫用がある。又、ババ(汚い)をババイ、ババチイと形容詞の形にするのも大人のさかしらである。仙臺の子供は針をツクモクと言ふさうだが、これは元チク〳〵(宇都宮・神戸)であッたのを、對句を喜ぶ大人の趣味から、こんな風に改造したのであらう。しかし、大人は、自然に右の法則を心得て居るから、大人の言葉から幼な言葉を作る場合に、この法則を應用する。マクラ(枕)をマクとし、オクスリ(御藥)をオックとするなど此例である。オコタ(火燵)オシメ(しめし)オイタ(いたづら)等の女言葉の起りも是で判ッた樣な氣がする。これらは、女言葉と幼な言葉と兩方の特色を備へてゐる。オの字の附くのは女言葉の特色である。コタ、シメ、イタ等と音の種類を二つに限定するのは幼な言葉の特色である。女は幼な兒に向ッて物を言ふ機會が多いので、自然、幼な詞が女の詞となッたのだらう。

以上は異なる音の種類の話であるが、音節の數にも制限があッて、四音節止まりである。たゞし、接頭語・接尾語の附いたもの、或いは複合語はこの限りではない。例へば、山口市で、肴をタイ〳〵ビービーと言ふが、これはタイ〳〵とビー〳〵との複合したものである。タイ〳〵も、ビー〳〵も四音節である。播磨では、物を「無い〳〵」することを、ナイ〳〵コン〳〵といふ。これもナイ〳〵とコン〳〵（共に四音節）との複合である。

幼な詞は、幼な兒と大人との合作である。幼な兒の發音には一定の傾向がある。その傾向をつかんで、大人の作ッたものが幼な詞である。だから、幼な詞に於ては、幼な兒よりも大人の占める役割の方が大きい。その證據には幼な詞にも語源がある。例へば、月をアートットー（薩摩）トートーサマ（岩手・佐渡）トーダイサマ（青森・岩手）といふのは、それ〴〵「ああ尊と」「尊と樣」「尊たい樣」である。これらは、月を見て子供が自然に發する聲では斷じてない。大人が月を拜む聲を聞いて、それを月の名詞にしたのである。從ッて、責任は大人の側にある。次に、血の幼な詞を見ると、アカカ（飛驒）は赤々、アカチ（尾張）は赤血、アカマンマ（常陸・上總）は赤水、アケェモンモ（磐城）は赤い水、ベンベン（各地）は紅々、マカ（青森）は眞赤、マッカチ（米澤）は眞赤血で、いづれも大人の造語である。次に、乳の幼な詞を見ると、アンマ、ウンマ、ウマ〳〵、オンマイ、オッパイ、メッ

ンメッー等、すべて、「うまい」「あまい」又はその語根から來てゐる。卽ち、大人の詞が先づ在ッて、幼な詞はそれから導き出されたものである。たゞ、メメ（目）テテ（手）等と違ッて、この方は大人の言葉の意味を轉じて、別の意味に使ッて居る。卽ち大人詞の「美味」が、幼な詞では「乳」になッてゐる。前にあげた月や血の幼な詞もこの類である。これを第三次的の幼な詞と呼んでもよい。

第一次的の幼な詞は擬聲語から來てゐる。動物なら其の啼聲から、道具なら其の音から名づけられる。全く音のしない物は世の中に稀なものである。たとへば、風呂や入浴を、ガボン（盛岡）ジャブ〳〵（福島）クブ〳〵（岡山・阿波）ダンダ（各地）バチャ（若狹）バッタン（日向）ボチャ〳〵（福島・宇都宮）等といふのは擬聲語である。船をギイコンコン（大阪市）ギッコン（近江）ギンギ（出雲）ヅイコン（近江）といふのも擬聲語である。腹をボン〳〵（東京等）ボンボ（同）ボッボ（各地）といふのも腹鼓の音である。裸をボン〳〵（東京等）ボンボ（山形）といひ、懷をボッボ（各地）といふのはその應用である。擬聲語は、その時代、その地方の感覺を最も忠實に反映したものではあるが、時代と地方とが違へば、感じも違ッて來る。たとへば、ウドンや蕎麥を啜る音は、現代の東京人なら、ツル〳〵と聞くだらう。ヅル〳〵では重苦しく、ソロ〳〵では、まるで感じにそぐはない。所が、幼な詞を見ると、ツル〳〵（東京市等）よりも、ソロ〳〵（各地）ソロ（信州・美濃・豐後）オソロ（栃

木・伊豆・豐後）オゾーゾー（駿河）ゾーゾ（尾張・出雲）ゾゾ（飛驒）ズル（備中）ズル〳〵（遠江）ズー〳〵（相模）ズーズ（美濃・尾張）ズンズ（信州）オヅル（相模・伊豆）等と濁ッた方が多い。ゾロは室町時代の女房言葉にもなッて居るから、この方が古い。卽ち、この三百年の間に、我々の感じが變ッた事が判る。猫の啼聲にしても、「源氏物語」の頃はネウ〳〵と聞いた。「ねう〳〵と、いとらうたげに啼けば」とある。これはネン〳〵と訓むべきだといふ說がある。ネコは、思ふにネンコのつゞまッた言葉で、幼な詞のニャンコと同じ筆法だらう。鹿兒島縣では、猫の啼聲をミャン〳〵と聞き、從ッて、猫の幼な詞はマンである。英語のミュー〳〵を聯想する。猫の漢音メウ、呉音ベウも、やはり啼聲から來たらしい。動物の名は啼聲から來たものが多く、この點、幼な詞と共通する。

擬聲語は必ずしも動物の名には限らない。たとへば、ハタ（旗）はハタ〳〵はためくから、クルマ（車）はクル〳〵廻るから、ツ（唾）はチューと吐出すから、さう名づけたので、幼な詞のバタ〳〵（旗）クル〳〵（車）チュースル（吐出す）と、命名の趣旨は一つである。この種の名づけ方は原始的な言葉には必ず多いだらうと思ふ。だから、幼な詞を研究する事は、大人の言葉の語源を搜る一つの手がかりとなる。私の言ふ心は、幼な詞を、後に、大人が採用したといふ意味ではない。昔、大人が物に名を附ける仕方は、今よりも遙かに子供らしかッたらうといふ意味である。今だッて、學者が干涉しなければ、物の名は、至ッて自然であり、子供らしくもある。

大人の言葉の内で、一番幼な詞に近いのは擬聲語である。擬聲語は意味を持ッた言葉としては一番原始的なものであると思ふ。感動詞は之よりも單純で、かつ原始的であるが、感動詞には意味が無いから、感動詞は、語といふよりも、むしろ、音といふべきである。

絶對に音のしない物も少しはある。この場合、幼な詞は、その物を巡ッて取りかはされる會話の破片から採られる。たとへば酒を、アーエーコ（岩手）といふのは「ああ善い」であり、ヨイヨ（遠江）は「善い〳〵」であり、カライ〳〵（岩手）は「辛い〳〵」と子供を制止する聲であり、カラ〳〵（播磨）も辛々、アーカラ（對馬）は「ああ辛」、アットット（岩手）オットット（岩手・近江）オトト（各地）オット（關東等）は酒を受ける人の掛聲から來たものである。また、神佛の幼な詞は、主として、神佛を拜む詞から來て居る。これには「ああ尊と」の系統と、南無阿彌陀の系統とある。アトタイサマ、アット〳〵、アトサマ、トートサン等は前者であり、ナムナムサマ、ナンマイサマ、マンマンサン等は後者である。而して、神佛の幼な詞は、日月、僧侶、燈明等にも應用されてゐる。乳や菓子や餅をウマ〳〵と言ふのも會話の破片と言ッてよい。飯のママも是である。動物の樣に、鳴聲のあるものでも、その鳴聲から採らずに、呼寄せる聲から採ッたものがある。たとへば、猫

をコッコー（隱岐島）といふのは「來々」である。カイ〳〵（石見銀山）は「來い〳〵」の訛である。タータ（信州）チャ〳〵（秋田・山形）チョン〳〵（肥後）トト（青森）等、すべて、呼び寄せる聲が、そのまま、猫の名詞となッてゐる。同じく、擬聲語と言ッても、ニャー〳〵などゝは、材料が違ふ。同じ事は犬の幼な詞にもある。犬の幼な詞にはワン〳〵、又はビョー〳〵といふ鳴聲から來たものゝ外に、コーコ、コーコー、ココ、コッコ、インコーコ、インコッコの樣に「來々」から來たものもある。カーカー（石見）カカ（秋田）ガンガ（信州・駿河）ガンガー（遠江）も、コーコーの系統である事は、犬を呼寄せる詞のカーカ（青森）ガガ（岩手）ガンガ、ガンガー、ガンガン（以上靜岡縣）と較べてみれば判る。出雲の斐伊川の流域では、犬を呼ぶのにトウ〳〵〳〵と言ふ。柳田さんは、「凡ろ〳〵」、だらうと言はれた。中國地方で犬をトウトコ等といふのは、この呼聲から來たものである。初は幼な詞であッたらうが、今では、立派な大人の言葉である。